

同窓会

ニュース・レター

第20号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2021年3月20日発行



中庭から見た文学部本館

目次

同窓会会長 あいさつ.....P2	研究室単位の同窓会(インド哲学・日本語学).....P7
研究科長 あいさつ.....P2	「教育ゆめ基金」のご報告.....P8
【特集】	第11回大阪大学文学部・文学研究科
疫病・ウイルスと文学.....P3~4	同窓会講座についてのお知らせ.....P8
同窓生からのメッセージ.....P5	事務局便り.....P8
退職される先生方からのメッセージ.....P6~7	

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

同窓会会長 あいさつ

玉井 暉

柏木隆雄前会長の後を受けて、今年度より文学部・文学研究科同窓会会長を引き受けることとなった玉井暉です。英文学専攻で、一九六九年（昭和四四年）文学部卒、一九七一年（昭和四六年）文学研究科修士課程修了です。

「同窓会ニューズ・レター」の創刊号（二〇〇三年三月発行）を見てみると、初代会長の石原実さん（一九五一年〔昭和二六年〕文学部〔英文学専攻〕卒業、石原時計店社長）の「会長あいさつ」が掲載されています。旧制浪速高校の時代から法文学部を経て文学部創設に至るまでの文学部の草創期にふれた文章です。私は、助手として三年、助/准教授および教授として二七年、文学部に在籍させていただいたが、この間、石原会長には大変お世話になった。この文章を拝読して石原さんのことを懐かしく思い出しながら、石原さんの後を継ぐ大役を引き受けることになった不思議なご縁を今深く感じています。

この「ニューズ・レター」の第一号には、河上晋作さん（英語学専攻）の研究科長就任のご挨拶も掲載されています。河上さんは、石原初代会長の後を受けて同窓会会長になられ、同窓会活動の活性化にご尽力されたことは記憶に新しい。そのあと、志水紀代子さん（哲学哲学史専攻）が受け継ぎ、同窓会名簿の発行など、同窓会の組織の充実に努められた。その後を柏木隆雄さん（仏文学専攻）が受け継ぎ、常任幹事・副会長、および研究科長として長く同窓会の発展のために力を尽くされた経歴を活かして、会長となられてからは、文学部同窓会の運営だけでなく、阪大全体の連合同窓会との連携関係の樹立にも腐心された。こうした歴代の会長を務められた方々を思い起こすと、その責任の重大さを痛感せずにはいられない。同窓会の会員の皆様のご協力とご助力をお願いする次第であります。

私は、二〇一〇年（平成二二年）に定年退職をし、阪大を離れて早や一〇年あまりになりますが、一人の同窓生として外から眺めて見ると、やはり気なるのが、文学部・文学研究科の研究と教育の内実です。今、どんな新しい先生

が来られていて、すでにおられる先生方と一緒にどんな研究をされているのか、その一端を伺ってみたい気がします。また、阪大の外に出て行かれた同窓会の会員のなかには、興味深い活動や活躍をなさっている方が多数おられるであろうが、その方々の活動や消息を知りたいと思う文学部の先生方も同窓生同僚の皆さんもおられるのではあるまいか。同窓会とは、そうした文学部の現職の先生方と同窓生の皆さんとの間の情報交換の場、相互の関心の結節点ではないだろうか。同窓会は、いわば母校と卒業生との双方向的な情報発信の場として、少しでも貢献できないものかと願っております。

今年度は、コロナ禍により、同窓会の活動も自粛の線をたどらねばならず、たとえば「同窓会講座」も延期を余儀なくさせられました。次年度からは、皆さんのお知恵を拝借し、ぜひとも同窓会活動を充実させたいと願っております。簡単ですが、これをもって同窓会会長就任のご挨拶とさせていただきます。



略歴
1946年生まれ。大阪大学文学部英文学専攻卒業。博士課程修了。大阪大学助教授を経て、大阪大学立助教授として着任。現在、大阪大学文学部英文学専攻助教授。専門はイギリス文学、批評理論。

研究科長 あいさつ

三谷 研爾

将来、21世紀の歴史が書かれれば、二〇二〇年はまがいなく時代の大きな切れ目として特筆されるでしょう。新型コロナウイルス感染症の猖獗は、人間の社会と文化を根本的に問い直すものになりました。感染は国内外でなおも拡大し続けており、予防・治療法の開発がすすんでいるとはいえ、収束にはまだ相当の時間を要するものと思われる。

大阪大学の活動もまた、大きな影響を受けています。とりわけ緊急事態宣言下の昨年春、キャンパスに学生の姿はなく、授業はむろん実験に忙しい理系研究室さえ閉室となりました。学生サークルの声も絶え、鳥の歌ばかりがひっそりした新緑の待兼山に響いているというかつてない情景が広がったのです。その後すこしずつ学生が戻り、秋以降は対面授業も一部復活していますが、元通りというには程遠い状況です。

文学部の教育の基本は、教員・学生が膝をつきあわせての史資料読解と議論ですので、オンライン授業で代替しても、おのずから限界があります。また留学生の受入れと送り出し、実地・発掘調査にも大きな支障をきたしています。他方、オンラインで海外と結ぶ研究会などは、時差の問題さえクリアすれば、かなりスムーズに運営できるといって経験も積んできました。昨年十二月、学内にあらたに発足した機構「グローバル日本学教育・研究拠点」のオープンニングイベントは、内外から一六〇名あまりの参加者を得て、成功裡に終わりました。この機構は、各学部の日本研究者を結集して阪大の人文学をさらに展開させるさい、駆動エンジンとしての役割をはたすこととなります。

そもそも人間が「集まること」「語るうこと」「自由に移動すること」にはどのような意義があるのか、「あたりまえの日常」の自明性はいかに根拠づけられるのか。医療や経済の諸問題の根底に横たわるこれらの問いが、コロナ禍とともにあらためて厳しく露呈してきた現在、それに応えるのが文学部の学問の使命だと思えます。



略歴
1961年生まれ。大阪大学大学院博士課程中退。大阪大学文学部総合科学部を経て2000年に文学部・文学研究科に着任。専門はドイツ・オーストリア文学、中欧文化論。主な著書に『世紀転換期のプラハ モダン都市の空間と文学的表象』（2010年三笠社）、『境界と言語』（2014年鳥影社）など。

特集 疫病・ウイルスと文学

二〇二〇年度を振り返るとき、新型コロナウイルスの世界な流行は抜きにできません。

大阪大学文学部・文学研究科も様々な対応を迫られ、学生も教職員も、多くの変化にさらされてきました。まさに未曾有の危機とも言える状況ですが、同じではなくても、かつても近似した危機はありました。日本を中心とした近現代の文学では、疫病やウイルスとの接触は、いかに描かれてきたでしょうか。その表現の歴史を確かめることは、社会と文学の関わりを問い直すと共に、私たちが現在生きているこの瞬間をどのように引き受け、受け継いでゆくべきなのかという問いへの手がかりになるはずで、日本と中国の近現代文学を専門とする教員が対談を行いました。

齋藤 新型コロナウイルスの流行下で、人文学の意義が改めて問われています。なかでも早い時期からメディアで注目されたのがカミュの『ペスト』でした。今回は『ペスト』以外にもこのような作品があり、問題を提起しているという話題を共有できればと思います。

鈴木 日本の近代においてもペストは恐れられていた病でした。明治三十三年一月から東京市ではペストなどの感染症の予防策として鼠の捕獲を推奨して、市が買いあげるといふ施策を開始します。夏目漱石の『吾輩は猫である』（明治三十八年）の冒頭部分、猫の「吾輩」と車屋のクロが出会ってユーモラスな会話を繰り広げる場面で、クロが「一（いつ）てえ人間ほどふてえ奴は世の中に居ねえぜ。人のとつた鼠を皆（み）んな取り上げやがつて交番へ持つて行きやあがる」と言っています。猫が「人

のとつた」というのがちよつと面白いですけど、ペストの感染予防策が猫社会にも波及していることがわかる。こういった場面にも当時の人々と感染症との戦いがかがいが知ることが出来ます。文芸雑誌『白樺』の作家郡虎彦『ペスト』（明治四三年）は、学校内でペストの患者が発生し、突然未来を奪われていく若者たちの苦悩を通して、病という不条理に直面した人々の心の動きを描き出しています。誰が感染してもおかしくないという相互不信が校内に満ちていくなかで、隣の座席の友人が感染死し、主人公は濃厚接触者とみなされて二週間の登校禁止を命じられます。その間に、不安や恐怖にさいなまれ、学問への無力感と己の学業が途絶することへの焦燥感にもがきながら、結局自分も医療崩壊による誤診で死んでいく。こういった姿は、現在の私たちの心には驚くほどの現実性をもって響くのではないかと思います。

齋藤 特に郡虎彦の作品は、学校、学生という身近な問題でもありますが、学問の意味を問い直さざるを得なくなる部分は、私たちに非常に大きな問いを投げかけてきますね。

鈴木 病にさらされているなかで自分たちの価値観が大きく変えられていく。その中で、社会のひずみも浮き彫りになっていくことが、小説を通じて見えてくるのではないかと思います。

齋藤 百年前のスペイン風邪の大流行を描いた日本文学としては、志賀直哉の『流行感冒』や武者小路実篤の『愛と死』が思い浮かびますが、菊池寛の『マスク』も面白く思います。肥満で心臓に疾患もある菊池自身と思しき男が、流行性感冒に強い不安を感じ、うがいもマスクもちゃんとして、外出も避けて徹底的に予防している。

毎日報道される死者数の増減に敏感になる姿も生々しいです。また、この作品には、流行性感冒が落ち着いてもなかなかマスクを手放せず、どのタイミングでマスクを外すのか迷う人々の気持ちが描かれています。今も多くの人は科学的な理由からというより、みんなが着けているから自分も…と、人の目を強く意識してマスクをしている。百年前から変わらないなと思える点で、現在も読むに値する作品だと感じました。

鈴木 菊池寛は『文藝春秋』をはじめ、メディアと深く関わった作家だからこそ、病に直面した時の人々と報道の関わり方の問題をうまく捉えている気がします。

中尾 尹先生がこれから紹介してくれる中国の小説は、同時代的というか即効性がある、ジャーナリズム的な作品ですね。

尹 武漢在住の作家の方方（ファンファン）により、ログクダウンした武漢の六〇日間の日常を記録したプロログが、『武漢日記』として書籍化されています。隔離状態の中で毎日起きたことを綴っていくのですが、面白いのは、隔離された状態だと、その情報源はテレビのニュースやネットや知り合いからばかりだったことですね。誰でも得られるような情報を方方なりに整理したり、見方を述べたりする。彼女の考え方に、特に読者に評価されたのは、死生の尊重ですね。感情的・プロパガンダ的に報道するメディアに対して方方は、亡くなった人の価値をどう考えるか、生きている人間のメンタルをどう保護するかなど、人間性に基づいた考えを示しています。また、知性をもって政治性と対抗する側面もあるので、当局からは好まれなくて、毎日アップロードした途端に削除されるのですが、多くの読者は彼女の日記を読むために、公開されるとすぐにシェアしたり保存した

りして、削除され続けるなかでも流通させていくような連係プレーをしました。ただ、彼女のブログは書かれた当時は賞讃の声が多かったけれども、海外で評価された途端に中国で批判の声が盛り上がったんですね。彼女の書き方は、結局外国の見た中国の姿なのではないかという、ナショナリズムが生まれてくるようなうねりが生じています。

もう一つは、エイズの問題を描いた閻連科（えんれんか）の『丁庄の夢』です。閻はカフカ賞も受賞した、国際的に知られている中国人作家です。閻の作品はすべてある虚構の貧しい村を舞台にしていますが、ノーベル賞受賞者の莫言と同じく、農村のなかで不条理と政治を見つめるスタイルです。中国では、血液売買がある時期まで大規模に行われていました。『丁庄の夢』も、村の経済を発展させるために村人が勧誘されて、みんな大規模な血液売買に取り込まれて、生活は一時的に良くなったのですが、衛生環境が悪かったので、血液売買の過程でウイルスに感染し、十年後には、多くの人がエイズを発症する話です。九〇年代に一部の地域で実際にあった話を元に書かれています。格差の問題ももちろん、患者のなかでも女性が受けた複数の抑圧が浮き彫りになっているので、ジェンダーと政治を絡ませて論じられる作品です。

鈴木 尹先生が紹介された作品は、病が政治や教育、経済的な格差、ジェンダーの問題と関わっていることを示しているように思います。ウイルスは越境的なものだからこそ、国境や県境という「境」を浮かび上がらせる。移動が制限される中で、見えにくくなっていったけれども、そこにあった境目や断絶が浮かび上がってくるという風にも思いました。

齋藤 線を越えて襲ってくるものが、かえって様々な線を強化していく。だから私たちは、意識しないで済んだ問題、あるいは見えないようにしてきた問題に、直面させられつつあるということですね。

中尾 バンデミックの状態では、人間のこれまで見えなかったドス黒いものも、人間内の境界も超えて見えてきているのかもしれないですね。

尹 『武漢日記』にも記録されて社会現象にもなっているマスクの買い占めなどは、人間の行動様式が極端に目に見えてくるようですね。

鈴木 内在されつつも抑圧されてきた差別や格差が、病を通して見えてきたからこそ、未来にむけて、私たちがどうやって解決していくかという可能性も手渡されているのではないかと思います。

中尾 悲観的に言うところ、文学作品にも解決策が示されているところまで読解できる受け手がいない、もちろん、私たちも含めて、全体的に文学力が落ちているのかなと危惧するところでもあります。

尹 でもいま遠隔授業をしてみると、学生も例年よりも「知」に対する要求が高い。知識や情報や表象といったものを必要としている気がしました。自分の状況や、今の社会に対して、もっと考えたい、知りたいように思った学生も増えていっているのではないかと思います。少なくともそれを必要としている学生には、できる限りの情報と考え方を提供できれば、かなり大きな成果なのではないかと思っています。

齋藤 まずは目の前の大阪大学の学生に伝えていくということですね。

(二〇二〇年八月二十五日、Zoomによる対談)

プロフィール



中尾薫 (なかお・かおる)
1978年生。大阪大学文学研究科准教授。専門は演劇学。共著書に『観世元章の世界』(2014)、『新才能マクベス』、『新作能オセロ』(2015・2019)、『東アジア古典演劇の伝統と近代』(2019)など。

プロフィール



鈴木暁世 (すずき・あきよ)
1977年生。大阪大学文学研究科准教授。専門は日本近代文学、比較文学。著書に『越境する想像力 日本近代文学とアイルランド』(2014)、共著に『文学 海を渡る』(2016)、『日本文学の翻訳と流通』(2018)など。

プロフィール



齋藤理生 (さいとう・まさお)
1975年生。大阪大学文学研究科准教授。専門は日本近現代文学。著書に『太宰治の小説の〈笑い〉』(2013)、『小説家・織田作之助』(2020)。共編著に『太宰治 単行本にたどる検閲の影』(2020)など。

プロフィール



尹苳汐 (いん・しせき)
1987年、中国四川省生まれ。大阪大学文学研究科助教。専門は日本近現代文学、日中比較文学。共著に『東アジアの中の戦後日本』(2018)、『ケアを描く——育児と介護の現代小説』(2019)。

同窓生からのメッセージ

私の礎の待兼山

柘植 忠明

二〇一〇年に文学部日本史学研究室を卒業して、一〇年が経ちます。JR九州に入社し、現場を経験した後、旅行業へ。複数の部署を経験した後、今年度からは宮崎で新たな駅ビル開発プロジェクトに挑戦することとなり、異動してきました。(二〇二〇年設立の新社・(株)JR宮崎シティへ出向) 現在担当している仕事は総務企画で会社の総務関係の仕事に加え、投資計画や資金計画、事業計画の策定を中心に行っています。

日々課題に向き合う日々ですが、大学時代の経験が基礎になっているのでは、と折に触れ感じています。勿論新会社なので前例はありません。参考とする事例はあるものの、基本的には道は自身でつくる、という仕事をしています。この仕事の「プレ体験」のようなものを実は卒論や研究室でやれたことというのが大きな経験になっていると感じています。情報収集を行い、課題を見つけ、可能な限り多角的な視点から検証を行う。その中で最適な道筋を立てていき、説得し、事業を形づくっていく。大半の人がやったことのないこと、答えが雲をつかむような状態というものは怖いものです。しかし、卒論を作成した時も似たような状況でした。無の状態から課題の抽出、仮設の設定、資



柘植 忠明 (つげ ただあき)
2010年大阪大学文学部日本史学研究室を卒業。九州旅客鉄道入社後、現場を経験し、旅行業へ。2018年に米国College of William and Maryにて経営学修士を取得。帰国後、決算関係の業務に携わった後、2020年より(株)JR宮崎シティで総務企画を担当。

黒衣からの挑戦状

出水 あゆみ

料に基づいた実証などを行いました。(日本史学研究室の諸先輩方にご指導いただきながら、図書館や研究室で史料のマイクロフィルムを追いかけた日々がとても懐かしく感じます。) 違うと感じることは組織を変える力をプラスアルファで求められることではないでしょうか? 多様なバックグラウンドをもつスタッフをサポートし、事業を推進していくという醍醐味を日々感じ、充実した社会人生活を送っています。

さて、このプロジェクトも来る二〇二〇年一月二〇日をもって一つの節目を迎えます。アマチュラザみやざきと呼ばれる駅ビルの開業です。コロナの影響があり、先行きの不透明感がありますが、必ず成長させ、軌道に乗せる—そんな気持ちで日々取り組んでいます。課題だらけの会社ですが、一つ一つクリアし、確実に登っていきたい。町の方々の期待に応える施設・サービスを提供したい。今秋、開業を迎えますが、卒業後の一〇年目に迎えたこのビッグイベントを、次の一〇年に活かすべく、日々過ごしていきたいと感じる日々です。

二〇二〇年度前期の朝ドラ『エール』の中で、幼い頃の主人公に恩師がこう語りかけるシーンがあります。

「人よりほんの少し努力するのがつらくなくて、ほんの少し簡単にできるもの、それがお前の得意なものだ」

私にとって、それは「校閲」という仕事でした。

数年のフリー期間を経て、現在私は「週刊文春」や文春文庫等を手がける(株)文藝春秋で校閲の仕事をしています。「校閲」とは、編集と印刷(ネット掲載

等も含む)の間に存在する工程で、原稿の誤字脱字や文章の乱れ、ファクトのチェックをし、発信内容に正確を期す仕事であり、出版界における黒衣のような存在です。報道記事で国際機関の統計データを参照することもあれば、時代小説では古地図も調べますし、ミステリーであれば謎や伏線の整合性もチェックします。最近では、差別的な表現・文脈へも目配りすることが求められるようになってきました。

この仕事の楽しさは、「迷う」ことにあります。校閲というとよく誤解されるのですが、実際は、何が何でも正しくと杓子定規に仕事をしているわけではありません(もちろんファクトチェックは厳密に行いますが)。「正確な文章」と「文体の個性」の間で迷う、「診る」と「見る」を峻別すべきか迷う、「淡海」のルビは「お＋うみ」「おう＋み」「お／う／み」か迷う……。また、かつて誤用とされていた「く」にも関わらず(拘らず)が、今や一般的になり許容されていくというような現代日本語の変化を、リアルタイムで感じられることも面白いことの一つです。(この関心のあり方と、大学時代に国語学を専攻したことは、私の中で繋がっています。)

しかし一方で、校閲はアンサンクな—誉め称えられることのない—仕事でもあります。百点が当たり前。黒衣の校閲の存在が意識される時、それは文章に何かミスがあった時でしかありません。それでもこの仕事を続ける理由、それは、正確な情報を、瑕疵のない物語世界を、読者に届けるための最後の砦という自覚です。……ところで、ここまでの文章に、誤字脱字はありませんでしたか?



最愛の辞書は「三省堂国語辞典・カーブ仕様」

出水あゆみ (みづ あゆみ)
2000年 大阪大学文学部人文学科国語国文学専攻 卒業
同 増進会出版社(現:Z会)入社
2004年 結婚・転居により退社
2005年 市学校図書館業務職員
2009年 フリー校正者
2015年 文藝春秋入社、校閲部配属
「文藝春秋」「週刊文春」等担当

退職される先生方からのメッセージ

◆「豊中キャンパス、今昔」

北原 恵

2008年4月に着任してから13年間、日本学講座で表象文化論やジェンダー論を教えた。阪大に通うのは人生で二度目である。1975年、大阪大学経済学部に入学したとき、同じ学年には200人中7人しか女子学生はいなかった。巨大な大学では女性職員も含めるとそれなりの人数がいたはずだが、私たちが使っていたトイレは男女共用しかなかった。そこで他学部の上級生たちが、トイレ内部にパーティションを作ったという要求運動をした。これをよく覚えている。遠くから眺めていただけだが、今ならそれがいかに切実な願いであり、現在のセクシュアリティや「障害」をめぐる問題につながる要求だったのがよくわかる。女性教員の数も少なく、私が受けたのはフランス語を教えるフランス人の先生が一人だけだった。ジバンを履いているという理由で授業から女子学生を追い出すことが、社会では喝采を持って受け入れられた時代である。卒業後、私はテレビのディレクターなどをして勉強を続けたが、過労のため脳髄膜炎で倒れた。それをきっかけに勉強を止めたが、過労を辞めて大学院を目指したのがベルリンの壁の崩壊した1989年。そしてコロナ禍に揺れる2020年度を迎えた定年。偶然にも世界の二つの大きな転換期に私の人生も節目を迎えたことを幸せに思う。着任後、学部生たちと一緒に阪大の女子学生や占領期の歴史を調査したのも、自分の学生時代の疑問から入ったものだったかもしれない。阪大に初めて女子学生が理学部に入学した1935年から時間はたが、はたしてどれだけ生きやすい社会になったのだろうか。さて着任から何年か過ぎて、いつも前を通る法経講義棟の正面にハナミズキの記念樹があるのに気づいた。そのハナミズキは、私が学部時代指導していただいた恩師の蛭山昌一先生(名誉教授・元経済学部長)に捧げられたものである。蛭山先生の専門である金融論はおろか授業にもほとんど出ておらず、推薦状や押印の必要などときしか連絡もしない身勝手極まりない不肖の弟子だったが、なぜか私のやることを面白がって可愛がってくださった。教師は学生の研究や活動を面白がるのが大切だと知り、幸運なことに教員生活では面白がらせてくれる多くの学生に恵まれた。彼らに心から感謝したい。コロナ禍でも春には豊中キャンパスには桜やハナミズキが咲き、猫たちがのんびりと昼寝を楽しんでいる。みんな、この時代を生き延び、美しい花を咲かせてほしい。



略歴
1956年、京都生まれ。東京大学総合文化研究科(表象文化論)満期退学、学術博士。甲南大学文学部教員を経て、2008年に大阪大学文学研究科に赴任。専門分野は表象文化論、ジェンダー論。編著書に『アート・アクティヴィズム』『攫乱分子@境界』『アジアの女性身体はいかに描かれたか』、美術批評『アート・アクティヴィズム』連載中(1995-)。

◆「研究の視点」より

須藤 訓任

思い悩んだ末、文学研究科の雑誌「待兼山論叢」に教員が毎号寄稿している「研究の視点」のうちいくつかを抜粋し、それにコメントを添えることで、退職の挨拶に代えることを許していただければと思います。
2005年・ニーチェに「苦境に立つ哲学」という言葉があるが、それは単に、哲学の存立が困難になってきた時代状況を指すだけのものではあるまい。むしろ、苦境にあることを哲学は本質とする。「苦境」とは状況に押しまわられ、切羽詰まった状態をいう。切迫した状況にいかにも敏感たりうるかに、哲学の命がかかっている。その限り、哲学とは時代が発しようとしていく問の発見であり、それへの応答だと言わねばならない。(本学赴任後最初の「視点」。気負いのようなものもあったかも)

2009年・三〇年ほど昔、中島みゆきの深夜ラジオDJ番組では投稿が取り上げられるとアクシケンなるものがもたらされた。私ははてつきり、握手してくれる犬のぬいぐるみかと思込んでいた。どんな形をしているのだろうかという友人たちに話したら、大笑いされた。むしろ正解は「握手券」。コンサートなどで優先的に彼女と握手できる権利の保証書。でも、学問研究とはこんな勘違いから始まることも多いだろう(終わることも)。こんなことを言えた時代が懐かしい。
2010年・毎年夏の夜ともなると、我が家の窓ガラスや門灯脇の郵便ポストの上には、アオガエルがやってくる。素知らぬ顔で獲物を待ち構える、チョコナンとしたその姿はなんと愛嬌がある。しかし、涼しげに不動の態勢をたもつその忍耐力と、一瞬の隙を見逃さぬ集中した決断力——これぞ、学問研究の極意! (半年後の東日本大震災など思いもよらなかった。同年末上梓された学位論文では予測不可能性(偶然)としての歴史といふニーチェの着想を強調している)
2018年・今夏の猛暑はすごかった。35度以上の日が関西では最長何日続いたことだろう。猛暑そのものに劣らず堪えたのが、天気予報。精度が上がったと言われて久しいが、数日後最高気温が30台前半に落ち着くと予報されても、前日ないし当日朝となると、35度越えに設定され直すということが何度もあった。研究の一進一退のこと? (この当時取り掛かっていた著書の最大の山場をなんとか凌いだ後だからこそ、こんな文章が出てきたのだろう)

全ての関係の方々への支えがあればこそこの16年半でできた。深謝あるのみ。



略歴
1955年、弘前市生まれ。1983年3月京都大学大学院文学研究科博士後期課程哲学専攻研究指導認定退学。京都の大谷大学にて20年ほど教職をこたえ、2004年10月より本研究科に着任。著書として『ニーチェ(永劫回帰)という迷宮』(1999年、講談社)、『ニーチェの歴史思想——物語、発生史、系譜学』(2011年、大阪大学出版会)、『存在と時間』第2篇評釈——本来性と時間性』(2020年、岩波書店)など。

◆人と出会う

服部 典之

私が言語文化部から阪大文学研究科に配置換えになったのは二〇〇一年一〇月である。二〇二一年三月末日での退職となるので、二〇年半の文学研究科生活であった。私は阪大文学部を卒業し、院にもしばらく在籍したので、阪大生活は計四一年間、人生の三分の二を阪大で過ごしたことになる。

その中で様々な人に出会ってきた。様々な同僚、教え子。同僚は優秀な方ばかりで、大きな刺激となった。学会の中でもトップの方ばかりが集まる場所が阪大文学研究科なので、勢い私も自分の所属する学会で様々な仕事をすることにも繋がったし、研究せざるを得ない立場となり、人生で一番勉強をした期間だったかもしれない。すばらしい同僚に恵まれ、具体的な名前前は出さないが、自分の人生を変えるぐらい素晴らしい方を二人だけ挙げたい。一人は言文時代と同僚で、後に私の研究室に来てもらった人である。私は彼の院生時代から学問面・人格面で高く評価していたが、その彼と最後まで同僚であったのは私の人生の数少ない幸福の一つであった。学問の方向性は私とは全く違っているが、学問のあり方と生き方を直結して思考する希有な才能の持ち主である。もう一人は私が文学研究科に赴任したとき学部四年で卒論指導をした方で、彼にも後、同僚となってもらった。様々な辛い日々を経験した私は彼がいなければ今まで生き延びることができなかったかもしれない。

もちろん、教え子は様々な素晴らしい人たちもいれば、誠心誠意指導をしたのに逆恨みをされることもあった。しかし、私は上で挙げた二人を得ただけで満足だし、私の生きる人生に意味をもたらしたと思っている。
私の退職は定年の三年前となり、四月からは関西外国語大学に務めることになる。英文学専門で院を担当できる教授を探していること、新天地で英文学の礎を築くことができたという想いで退職を決定した。大学は移るが、阪大英文科は上で書いた二人等が支えてくれているので、二つの大学の間に強力な協関係構築することが私の切実な願いである。



略歴
1958年、広島県生まれ。大阪大学文学研究科(英文学専攻)博士後期課程中退。和歌山大学助手、大阪大学言語文化部講師、助教を経て、大阪大学文学研究科としてのフィクション——『デフォーとスモレット』、『ガリヴァー旅行記』徹底注釈など。

◆退職のご挨拶

桃木 至朗

人文学の苦境に加えて新型コロナウイルス禍。こういう時期の退職については複雑な思いも湧くのだが、二十七年間勤めさせていただいた阪大文学研究科／文学部には感謝の気持ちで一杯である。文学部の前に所属した教養部、途中で派遣教員として3年間に在籍したコミュニケーションデザイン・センターも含めて、阪大の環境は「全体を見ながら他人のやらない変わったことをやる」「複数の世界にまたがって活動する」などの思想が骨の髄までしみついていて私にはびびりだった。阪大に来る前に教えていた旧大阪外大の仲間たちと統合によって再会できたことも、力になった。実行力が不十分で聞き上手ではない私が、もともと専攻していたベトナム史・東南アジア史以外に、海域アジア史とグローバルヒストリーやジェンダー史、歴史教育の高大連携など次々手を広げることができたのは、そうした阪大の環境やそこでの出会いに負うところが多かった。勤めていたうちには阪大が旧帝大中でもっとも平凡で保守的な側面をもつことにも気づいたが、それすら今となつては、東南アジア史軽視への怒りをあらゆる活動のバネとする私を鍛えてくれたものと思える。

私の力不足や軽率のせいで失敗したり同僚・学生に迷惑をかけたことも多々あるが、良い思い出や達成感も数多い。なかでも「合同演習」「英語ゼミ」などを中核とする阪大東洋史独特の教育システムの幅をさらに広げるべく、外国語学部との東南アジア各言語専攻や海域アジア史とグローバルヒストリー、それに歴史教育など外部の諸活動とつなげ、留学や海外調査、国際学会にも学生を引っ張り出すことに取り組んだ経験は、人文学の教育における体系性・系統性の軽視に強烈な不満をもっていた私には得がたいものであった。そこで進めた教養教育での講義「市民のための世界史」のコーディネートと教科書の編纂、専門課程での「歴史学方法論講義」の設計（教科書編纂を退職までに完成させられなかった非力が悔やまれるが）などの活動は、同僚たちや高校教員の協力・助言のおかげで、東洋史の教育システムと同様、現代日本の状況に照らして圧倒的な先進性をもつものになったと自負している。「注文の多すぎる」これらのシステムと格闘しながら立派な研究者・教員や社会人になった卒業生・修了生諸君には賞賛の念しかない。皆さん、本当にありがとうございました。



略歴

1955年生まれ。京都大学文学研究科博士課程（東洋史学専攻）単位取得退学、広島大学で2009年に論文博士の学位取得。京都大学助手、大阪外国語大学専任講師、大阪大学教養部・文学部助教授などをへて2001年4月から大阪大学文学研究科教授。著書に『海域アジア研究入門』（共編著、岩波書店、2008年）、『中世大越国家の成立と変容』（大阪大学出版会、2011年）、『市民のための世界史』（共編著、大阪大学出版会、2014年）など。

文学部・文学研究科では、多くの研究室がそれぞれの同窓会活動を行っています。
今回は、こうした活動のうち、インド哲学と日本語学の活動を紹介します。

阪大イン哲の15年を振り返る 堂山 英次郎

インド哲学研究室は現在、堂山（教授；ヴェーダ学、インド・イラン学）と名和隆乾講師（インド初期仏教）を常勤教員とし、学部生、大学院生、研究生等合わせて十数名の学生が在籍している。残念ながら数年来助教は取れず、教務補佐員に来てもらっている。

同窓会ニューズレターへは、私の着任間もない2006年に当時の河崎豊助教が「イン哲の『いま』」を寄稿したのが最後だったろうか。その後15年で研究室も様変わりした。4階にあった研究室は耐震工事に伴い3階へ移転。天界からは遠のいたが、部屋は小綺麗になった。また最近の出来事として、長年研究室を率いてきた榎本文雄教授（現名誉教授）が2018年度を以て定年退職され（写真は記念パーティ）、かつて同教授の薫陶を受けた名和隆乾氏が仏教担当教員として新たに加わった。前出の河崎氏は当時の研究室を『「ヴェーダの思惟から初期仏教・ジャイナ教思想への展開」という、インド思想上極めて重要な潮流を歴史的に悉く押えた、世界的に見ても稀な構成』と紹介しているが、これは阪大イン哲の旗印として今も殆ど変わっていない。名和講師は堅実な文獻学的研究に加えて、仏教的観点から現代の問題にも取り組んでいるほか、コンピュータやデータの活用にも明るく、イン哲の更なる発展を担うべき期待の若手である。

学生の研究領域も以前より多様化しており、演習発表では毎回興味深い報告と活発な議論を聞くことができる。卒業後の進路としては、大学院を経て就職することが一般化したほか、教育職に加え（イン哲らしからぬ？）一般企業に就職する人も増えた。ここで培われた論理的思考、批判的精神、忍耐力が様々な場面で遺憾なく発揮されている（と思う）。私は「人文学は社会に役立つか」という議論には、一言「人文学は人間に資する」とのみ答えるが、その人文学を地で行くのがイン哲であると信じている。今直面するコロナ禍と研究科改組にもその矜持を持って臨みたい。

同窓会企画「あれから10年の会」と 会報の《短信》・連載企画

高木 千恵

日本語学研究室の同窓会組織は「日本語言語系同窓会」として1992年3月に発足し、その後1998年10月に「阪大日本語学同窓会」と改称して現在に至ります。原則として年に1回、研究会（研究発表・講演、現場報告など）と総会をメインに据えた同窓会を開催してきました。また「東下りの会」という名の関東支部があり、こちらも年に1回、関東在住の同窓生が集って親睦を深めています。

同窓会の人気企画に「あれから10年の会」があります。これは、卒業・修了からちょうど10年になる同窓生を対象にした部会で、研究会とは別に部屋が用意され、参加者と自由に語りあうことができます。この会のために大学卒業後初めてキャンパスを訪れるという同窓生もいて、該当年度を心待ちにくださっている方の多い企画です。昨年（2020年）は日本語学研究室で学んだ学部一期生が3回目の「あれから10年」、すなわち卒業して30年を迎える節目の年だったのですが、コロナ禍によって通常の同窓会活動を行うことが叶わず、残念でした。

本会では定期的に、会員の近況報告を寄せていただくようメールで依頼し、いただいた返信をとりまとめて《短信》として会報に掲載しています。卒業・修了してから顔を合わせる機会のない同級生や先輩・後輩たちの現在の様子がわかるため、毎回楽しみにいただいているようです。また2014年からは、歴代の助手・助教経験者に当時の思い出を綴っていただくことで研究室の歴史を辿る連載「助手さんは見た！」も始まりました。時代が変わっても変わることのない「日本語学研究室らしさ」が窺われ、時期は違えど同窓生がみな同じ研究室で青春時代を過ごした仲間であることを感じさせてくれる連載記事です。

次の同窓会開催時期は未定ですが、会報はメールで配信する予定です。メール会員でない日本語学の卒業生・修了生の方、日本語学研究室までお知らせくださると幸いです。



同窓生の鈴木輝子さん（昭39卒）より、他にも多くの同窓生が在籍されている待兼山俳句会が贈呈された合同句集「待兼山」を贈呈していただきました。待兼山句会では、阪大関係者であればどんなでも大歓迎とのことでした。

◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄付いただければ幸いです

文学部創立60周年(平成20年)の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。2013年秋に大阪大学「未来基金」と窓口統合したことにより、いっそう多くの同窓生ならびに教職員の皆様より、2020年度総計95万9千円のご寄付をいただきました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。(文学研究科長 三谷 研爾)

2020年1月～2020年12月「教育ゆめ基金」寄付者リスト(敬称略・五十音順)

深水香津子	林 晃弘	藤田 隆則	横地 隆弘	江川 温
吉田 優子	小林 晴美	石原 実	磯島 啓子	河上 誓作
森本 慶太	筒井 信一	上山 泰	宮川 文子	藤井 弥生
森下 育浩	渡辺 義嗣	荒牧 典俊	小林 正人	伊地知仁子
森島 貴志	志水紀代子	粟屋美知代	北村 麻子	このほか、氏名掲載を 希望されない方16名
中邑 勝	若田 田美	井上 雅一	浦崎なぎさ	



◆「教育ゆめ基金」の支出(見込)(2020年4月～2021年3月)

・文学研究科大学院生海外調査等助成 230,000円(1名分) 計 230,000円
※2020年度末残額(見込):12,051,000円

◆第11回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座についてのお知らせ

令和3年度の同窓会講座は、開催延期となった令和2年度講座の金水敏教授(文学研究科・国語学)によるご講演を予定しておりました。しかし、現況のCOVID-19の感染状況を踏まえ、残念ながら、開催を見送ることとなりました。オンライン開催の可能性も検討しましたが、同窓会という性質上、対面での交流も講座の役割の一つであろうと思います。みなさまのご健康と安全を祈りつつ、いつか対面でお会いできる日を楽しみにしております。

事務局便り

●お知らせ

◇文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿(二〇一七年版)について
二〇一七年三月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』ご購入を随時承っております。頒価(五千四百円・送料込)でお送りいたします。ただし名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承ください。なお、新規に同窓会終身会費(一万円)をお支払いいただいた方のうち、希望される方に一冊呈呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。
◇ご購入希望の場合は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご購入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくお問い合わせ下さい。

◇同窓会へのご寄付について

同窓会では、寄付金(一口二千元)を受け付けております。これまでに、たくさんの方にご支援を賜りました。誠にありがとうございました。引き続きご支援をお願い申し上げます。

【名簿購入代金・終身会費のお支払い、ご寄付の受付】

口座番号 009401179043
加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局
*お手数ですが、通信欄に①卒業・修了年、②専攻専修名をご記入下さい。

●お願い

◇住所変更について
住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所、電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

●大阪大学文学部・文学研究科同窓会

◆会長 長 玉井 暉 (S四四卒) 服部 典之 (S五六卒)
◆副会長 村田 路人 (S五二卒)

◆事務局メンバー
◆事務局長 舟場 保之 (S六一卒)

◆総務 高木 千恵 (H一〇卒)

◆企画 西田有利子 (S五六卒)

◆広報 田口宏二朗 (H六卒)

◆事務局補佐 齋藤 理生 (H一〇卒)

◆事務局長 米田 恵 (R二修)

田中 英理 (H一〇卒)
中尾 薫 (H一五修)

住所: 〒560-8502 豊中市待兼山町「番五号」

ホームページアドレス: <http://www.letosaka-u.ac.jp/dousou/>
事務局メールアドレス: dousoukai@letosaka-u.ac.jp